白山台中

主体的に思考・判断・表現する生徒の育成

～「問い」をもち、主体的・対話的に探究する学習活動の研究を通して～（２年計画の１年次）

校長　伊崎　己治

１　研究主題について

本校では、昨年度まで２年間「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」を目指し、「主体的に思考・判断・表現する生徒の育成」を研究主題に定め、研究を進めた。特に昨年度は、「学習評価、評価結果の分析、それを前提とした学習活動を効果的に連携・循環させて、生徒の学習改善、教師の指導改善を図る」ことをねらい、「指導と評価の一体化」についての研究を推進した。

「指導と評価の一体化」についての理解を深め、「評価を工夫し主体的・対話的な学習につなげることの実践」については一定の成果を得たが、「前段階の評価結果を分析し、次段階の課題を発見させる働きかけの工夫」、「生徒の自己評価や相互評価から課題を見出させ、その解決を図る探究の工夫」が課題として残った。

以上のことから、今年度から２年間「主体的・対話的で深い学び」を深化させるために、生徒の「問い」を引き出すことを主眼として、教師側のしかけの工夫や生徒への支援の工夫、評価の充実について追究する。

２　研究のねらい

昨年度までの研究副題でもある授業と評価の一体化を意識しながら、生徒が自らの学びに今以上に主体的に取り組めるよう、教師による効果的な“しかけ”の工夫や、生徒の「探究」を支援する教師側の手立てと指導法の工夫によって、生徒の学習意欲向上につなげる。

３　研究仮説

前段階の学習評価を受けて、生徒が「問い」をもつような教師側の“しかけ”を工夫することによって、生徒が意見をもつとともに、他者との対話を通して探究に向かえるよう支援する。これらに継続して取り組むことで、生徒の「主体的に学習に向かい探究する力」を高めることができると考える。

４　研究内容

(1)　年間指導計画における長期的な「指導と評価の一体化」の工夫

ア　１単位時間の授業、単元指導計画等における短期的な指導と評価の一体化の工夫。

イ　日頃の継続的な実践から、次単元や次年度の指導につながる問題点の共通理解。

(2)　学びに向かうための教師側の“しかけ”の工夫

ア　「主体的な思考・判断・表現につながる発問・活動指示・教材提示・課題提示」の工夫。

イ　「課題に気づいたり、共有した課題を解決したりするための話合い活動」の設定の工夫。

ウ　「相手を尊重して話し合う態度」、「根拠を明確にした意見の述べ方」等について教師間の共通認識と情報共有。継続的な指導のための学区内小学校との連携。

(3)　特別支援教育の視点を踏まえたユニバーサルデザインに基づく授業づくり

(4)　ＩＣＴを活用した思考力、発信力、自己表現力の育成

５　研究の経過

(1)研究仮説に基づく授業研究

月	日	授業研究（内容）
7	上旬	・授業相互参観週間（教科・領域部会）
9	4	・教育指導課訪問参観授業（教科・領域）
１０	中旬	・授業相互参観週間（教科・領域部会）
１１	1	・中教研教科部会授業発表　国語授業者：工藤史奈・数学授業者：目時沙織 美術授業者：大前彩香（中堅研後期授業研究を兼ねる）
１２	初旬	・中堅研前期授業研究　英語授業者：佐藤茉衣

(2)一般研修

月	日	一般研修（内容）
4	4	・校内研修計画についての共通理解（研修主任） ・危機管理研修（教頭　柳谷貴広、養護教諭　田中亜紀）
4	２０	・１人１台端末（Chromebook）を使用した授業の活用実践事例の交流研修 主担当　視聴覚部担当：菰田聖一　教諭
8	3	・救急救命法講習（養護教諭　田中亜紀）
8	9	・「主体的に思考・判断・表現する生徒の育成」についての共通理解 教育指導課　中村美穂　主任指導主事
8	中旬	・授業研究週間に向けた指導案検討会２（国・数・美部会） ・教育指導課訪問に向けた指導案検討会（教科・領域部会）
9	上旬	・授業研究週間に向けた指導案検討会３（国・数・美部会）
2	下旬	・次年度の校内研修について

６　研究の成果

(1) 授業実践における教師側のしかけについての講話から、「教師のはたらきかけ」と「対話的活動」「指導と評価の一体化」について、校内での共通理解を図ることができた。

(2)「主体的・対話的な学習につながる評価活動」の実践的研究のまとめとして、中教研での研究授業において、日々の授業実践の中での主体的・対話的な学習活動の展開の一例を提案できた。

(3) 授業における ICT 機器の活用事例をについて交流研修したことで、プレゼンテーションソフトを使用した学習活動や、映像資料の提示など、使用頻度や活用法が昨年度より充実した。

７　研究の課題

(1)対話的・探究的な問題解決をより充実させ、互いの意見や考えを交流させ学び合える効果的な場の設定の工夫が今後も必要と考えられる。また、生徒と教師、生徒間でのやりとりの中で用いる語彙を増やすことなど、「正しく伝える力」の向上が新たな課題として浮かび上がった。

(2)生徒が課題解決を終えた後も、新たな課題の発見や探究に向かう意欲を高め、自ら課題解決に取り組めるよう、発展的な探究や知的好奇心を育む課題の設定が今後も求められる。

(3)ICT の活用にあたり、備品機器の保管場所や現有数・使用状況など、管理運用面で職員間の共通理解が今後必要になる。また、活用事例の共有など授業実践の蓄積を継続していく必要がある。

（記入者　大久保　俊行）